

「技術革新」時代の科学的労働

——芝田進午の社会理論から——

東京大学大学院 馬渡玲欧

【1 目的】

1956年度の『経済白書』での言及を契機にシュンペーターの「イノベーション」の訳語である「技術革新」が日本で流行語になったと星野は述べる（星野 1969）。とりわけ「技術革新」の代表的な例はオートメーション技術の普及ということになるだろう。この時代の「空気」は日高六郎の言葉を借りるならば「機械時代」として言い表すこともできる。本報告は「技術革新」、とりわけオートメーションがもたらした当時の大きな変化として労働の変容を取り上げ、その変化を同時代の論者がどのように捉え、考察していたかを振り返る。この作業を通して「技術革新」時代あるいは「機械時代」の社会理論の可能性と限界を検討したい。

【2 方法】

方法として社会学者、哲学者である芝田進午(1930-2001)の議論を再検討する。芝田は『人間性と人格の理論』(1961年)『現代の精神的労働』(1966年)『科学＝技術革命の理論』(1971年)等の著作で知られる。芝田の科学労働論について整理したうえで同時代の他の社会哲学者達の議論と比較する。そのうえで芝田が考えていた「科学的労働者」による「普遍的労働」のユートピアの可能性がどのように潰えたのか、あるいは成就したのかを考察する。

【3 結果】

『科学＝技術革命の理論』にて「オートメーション」は「労働手段の最高段階」として位置づけられているが、オートメーションの発達による労働の変容は、単に「機械」の発達によって肉体労働から解放される事態とは異なる。つまり、精神労働による「自然との物質代謝」のための媒介さえも、オートメーション技術が取って代わるという認識を芝田は示している。したがって「直接労働」は減少し、科学法則の発見や新しい装置設計といった「普遍的労働」に人間は一層従事するようになるとされる。ここで芝田は「普遍的労働」がフーリエ的な「魅力ある労働」となり、余暇時間と労働時間の止揚が起こるとも述べている。したがって、芝田の認識では「労働者」はすべて「科学労働者」となるのである。続けて芝田は以上のような自身の理論を基に、大学教育論や「科学の階級性」等の議論を展開していくことになる。

【4 結論】

この芝田の理論をフランクフルト学派第一世代の科学技術論、特にH・マルクーゼの議論と比較してみると、両者ともマルクス『経済学批判要綱』の影響を受けつつ、特にオートメーション技術の普及による「自由時間」の増加、フーリエ的労働への展望について共通した見解を示している。(ただしマルクーゼは芝田のようにオートメーションの完全な普及が剰余価値法則を消滅させるとまでは言及していない点では異なる。)このように考えると、芝田しかり、マルクーゼしかり、当時の科学技術論における典型的な語り方、ロジックの独特さ—とりわけユートピア社会、あるいは社会主義社会への展望—が導き出せる。

しかしながら現在の時点からこのようなユートピア社会の展望を楽観的に語ることは果たして可能だろうか？現代社会に対する示唆が仮にあるとすれば、「労働者としての科学者」「科学者としての労働者」という認識を今一度明確に明確にしなが、(研究を進めていくうえでの倫理的指針とは異なる)「職業倫理」を提起することになるだろう。

文献

星野芳郎, 1969, 『技術革新の根本問題』 勁草書房.

芝田進午, 1971, 『科学＝技術革命の理論』 青木書店.